

甲賀忍者の系譜 (59・6・16)

望月 秀祐 (昭22理)

ただ今、紹介をいただきました望月でございます。戦後最初の卒業生でございます、といひまして、あと私達三高卒の後輩の方は少ない時期での卒業の望月でございます。今日は、私が甲賀忍者の系譜の話をいたします。この会は専ら、学問的なお話が多いようですが、私の話は学問的な裏打ちがないということを最初にお断りしたいと思います。

私は滋賀県の甲賀の生まれでございます。甲賀流の望月と申します。いわゆる甲賀忍者の本流であるという系譜は、はっきりいたしております。私が甲賀忍者、正確に言いますと甲賀武士でございますが、甲賀武士の望月家の第十四代ということで、現に私がおりますことだけぐらいますが、本当の値打ちでございます。お手許の説明書を参考にいたしながら、お話をさせていただきます。私は日比野さんから御紹介を頂きました通り、この三月まで京都市役所で都市計画の仕事をやっていました。正確には前半は建築、後半は都市計画の仕事ということで、三十四年間専門的な

仕事をしてまいりました。そういう意味におきまして、忍者屋敷という屋敷はまさしく建物でございますから、私としても専門的には甲賀忍者屋敷の建物について当然、関心があるわけでございます。しかし、今は京都で生活をいたしておりますから、京都の忍者屋敷のことを先に申しますと、神泉苑の近くに二条陣屋というのがございます。この建物は大名屋敷でありますだけに建築的には甲賀忍者屋敷より、りっぱな建物であると思っております。

私が甲賀忍者の末裔であるということがわかったのは、昭和三十年でございます。従いまして、市役所に勤め出してから判ったことで、その昔は何も判らなかつたということでございます。と言いますのは、私の母が若いころ住いをいたしておりましたのは滋賀県甲賀郡で、その建物は全く農家風で、そのような建物が実は忍者屋敷であつたということの想像は全然できませんでした。事実、忍術というものにつきましては、江戸時代になりましたら、もうほとんど不用になり、徳川幕府が公儀隠密として使うぐらいが本当の忍術の最後の仕事でした。忍術そのものは平和な時代ではもう必要なくなりましたので、忍者屋敷も、江戸時代からは薬を作り、薬を売る会社の社宅兼自宅というようなことであつたと思つています。

昭和五十八年八月の末にNHKの「歴史への招待」というテレビの番組の中の『追跡・甲賀忍者軍団』という番組に、私が出るようにいわれ、曾て私の先祖が住いしていました滋賀県の甲賀忍者屋敷へ出向き、そこでテレビを撮られました。その結果、テレビ放映が全国の番組に流され



テレビ出演した甲賀忍者一族（昭和58年7月）

ましたので、それから後が大変で、私
が甲賀忍者の本家のいわゆる末裔であ
るといふところから、人に会うたびに
そのことばかり言われまして、いち
ち説明するのに往生しました。先程も
言いました通り私の家が十四代続いた
甲賀忍者の流れであるとわかったのは、
昭和三十年でございます。それも自分
で調べたことでなく、地元の考古学研
究者の方が調べた結果であります。私
はそれまでは人に会えば都市計画や建
築の話ばかりしておりましたが、テ
レビに出てからは忍者の話ばかり出さ
れるようになりました。たとえば、新
聞記者がやってきて「テレビで見まし
たよ」といわれ、ああ、また忍者の話

かなと思うといや、都市計画のことであったりしました。

その後、京大の建築の西川幸治教授が、サンケイ新聞の中で甲賀忍者屋敷と私のことを書かれました。その記事の中で、私は甲賀武士の流れであって、そして今では京都市の都市計画の仕事をしているからおもしろいというようなことが書かれ、「疾風の如く神出鬼没の動きを見せ、甲賀の天地を駆けめぐった甲賀武士の働きこそ、今の京都市に必要なものであろう」としめくくられていきます。何も忍者と京都市のまちづくりとは関係はないのですが、京都のまちづくりの弱さをつかれたものと思っています。いずれにしても甲賀忍者という軍団、軍団という語呂は響きがいいものですからよく使いますけれども、この甲賀忍者の歴史を調べてみますと、何と云いますか、そんなロマンティックなものじゃなしに、人生の裏街道を歩くような家業であっただけに興味本位は別にして、あんまり大きく自慢できる職業ではないと思っています。実際には、その忍者という表現も正確ではなく、甲賀武士で忍術を会得した者という意味であります。忍者といいますがと雇われものと思われ、専ら徳川幕府に雇われ、いわゆるお庭番とか隠密とか、そういうようなことでやっております者を指すようです。私の先祖は忍術を特技とする甲賀武士で雇われ者ではありません。

映画がサイレントからトーキーに変わった時期に忍術映画がブームになりました。その時期は私は小学生のころで、新京極の、しかも料金の安い第二京極へよく通ったものです。この子供時

代に忍術映画を見て、それで私自身も大変忍術に関心をもったという記憶がございます。私の母は十三代目でございますが、その説明書に書いてございます通り、滋賀県甲賀郡甲南町龍法師、龍法師と書いて「りゅうぼし」と読みますが、この地に私の母は生まれております。国鉄草津線の甲南駅から西の方に歩いて十五分程の近いところに小さな村がございます。その中にこの甲賀忍者屋敷、元望月家の屋敷があるのでございます。私の家が昭和三十年になって、はじめて甲賀忍者屋敷であったということがわかったくらいですから、私の母が若いころ、この忍者屋敷で生活をしていましたが、当然忍者屋敷とは知りませんでした。しかし、母は自分の家に色んなからくりがあることを知っていました。大正の時代に十数名の盗賊が入りまして、土蔵の中の色々な物を持ち出して、大きな被害を受けたということを母から聞いております。

先程日比野さんから紹介がありました甲賀五十三家という多くの甲賀武士の中で私の家が筆頭であったらしいですが、それだけにその敷地はずいぶん大きかったです。そういうような時代から徐々に周りの土地は他人の土地に移っていきましましたので、現在では、敷地は小さくなっています。大正時代に多数の盗賊が入ったということから、そういうことが繰り返されたら困るところに出るとか、何かそういう装置があるということをも母から聞いておりました。からくり装置云々というのは、一種の趣味のようなもので作られたものではないかとも思っていますが、そ

れが甲賀忍者の屋敷だからそういうからくりがあるんだというようなことになってしまっております。今でも私は、それが本当に正しいかどうかは、少々疑問に思っているのでございますけれども、まあ一応そういうことにさせていただきます。

甲賀五十三家の中で、望月家というのは私の方のところだけでございますが、その望月家にしなくても分家が多くあり、ややこしいものですから、一号から、ここでは九号まであり、今でも一号、二号の望月というようなことで、号を付けて呼んでいます。大抵その話をしますと、二号の望月さん、二号というのはおかしいという話になります。NHKのテレビの時も鈴木健二アナウンサーが、私の一族が一号から九号まである話をしましたら、案の定「二号の望月さんは今日来ておられますか」と、問われました。

そこで、甲賀の里にだけ何故、忍術というのが発達したんだろうかということも私も不思議に思っておりますが、それはやはり地理的な条件が一番大きかったのではないかと思います。それは京都、大阪に非常に近いということにあります。甲賀の東に伊賀がございますが、甲賀流も伊賀流も共に元は一つでございますが、伊賀の方の忍者の場合、いがぐりという言葉をもじって、「いがをむいたら粟だ」という諺がございます。つまり伊賀から京都まで九里だと、まあ実際はもう少しあると思いますけれども、四十キロほどあります。それ位の距離だと、マラソン式に走るなら二、三時間で京都までこられます。このように大変京都、大阪に近いということが忍者の

格好の場になったようです。それから、その甲賀というのは滋賀県の中でも南の方に位置し、琵琶湖に接しておりません。その甲賀の里からさらに南の方は、山々が連なっており、大和の方まで続いています。山が周りに高くそびえているところから、それがそのまま天嶮けんの要害になっっているのも忍者には好都合であったようです。実際にこの甲賀忍者屋敷はある時期には広い敷地に大きな建物があったものですから、甲賀御殿あるいは望月御殿とか言われました。

また、このような京都とのつながりから、昔の歴史に登場する多くの人物が戦争のさなかに落ち延び、再起を図ろうとして私共の屋敷であった甲賀忍者屋敷にかくまわれていた事実が、歴史の上に盛んに出てまいります。これらの落人をかくまうために、屋敷に防犯用のからくりが必要であったのではないかとも思っております。実際に、先程言いました甲賀五十三家という大きな組織がございましたので、団結して外敵にあたったということです。実際に過去の歴史を調べてみますと、ほとんど甲賀の里の中まで敵が入りこんできたことはないようです。ただ、織田信長が甲賀、伊賀、特に伊賀の方を征伐しようとして攻めこんできたときが、最初で最後のようです。明治以降になりましたら甲賀の里というのは道路、水路あるいは山が続いているというようなところから、軍事大演習がたびたびこの地で行われました。当時有名な野津、黒木、乃木、児玉などの陸軍大將がこの甲賀の里で演習をいたします時に、忍者屋敷を総本部にしたという記録が残っております。当時としては大変名誉なことであったといわれておりました。

私も終戦直前、直後の食料難の折は三高の学生時代で、しばしば買出しに甲賀へ出かけました。私の望月家は一代目からずっと望月本実(ほんじつ)という名前で、ずっときておりますが、その買出しに行った時も本実の孫だということが、大変買出しに役に立ちました。

古い資料を探してみますと、次のような記録がありました。

この望月一門は、千年にわたる郡内著名の豪族であって、分家・支流が各村に居住している。実に、望月家は、甲賀五十三家中の筆頭的存在であって、この地方の領主であった。

先祖は、遠く清和天皇の孫、日の宮第四の子、惟康善淵公であるといわれ、子孫、月輪七九曜を定紋とするのは、天慶二年(九三九年)、平将門の乱のとき、追討戦勝の恩賞として、伊勢大神宮の御垂形、月天九曜の御幡(はん)を賜ってからであるという。

醍醐天皇のとき、信濃国望月明府之住人諏訪左衛門尉(じょう)源重頼、朝廷に仕えて武勇特にすぐれたといわれるが、その子に三子あり、その三男こそ望月三郎広重兼家であって、将門退治の勲功多きによって甲賀郡を賜り、改名して甲賀近江守三郎兼家(注・甲賀・伊賀流忍術の元祖)と名乗った。

のち、度々の戦功によって、伊賀の国を賜り、甲賀郡の竜法師(注、甲賀忍者屋敷のある地)には夫人と子重兼と国重の三人を残し、伊賀国千歳佐那具に居城した。……

武將あり、僧侶あり、忍者隠密、医者、等々あつて、慶長五年（一六〇〇年）伏見籠（ろう）城のとき戦死した望月半左衛門は隠密の元祖といわれている。……

かくて、忍者は、生涯不断の猛訓練を重ね、忍耐強く努力したのであつて、食糧なども、自然、携帯口糧が必要となり、二十種にあまる忍術兵糧丸、水渴丸、飢渴丸等がつくられ、薬品もまた種々適切なものが製造されたのである。……

「忍術本家、望月本実家は、十二代本実のとき、明治三十五年、近江製剤株式会社にした」大戦中、外地での携帯口糧としてこの忍者兵糧の製造が研究されたと聞いている。これら代々の忍者は「忍術は国家を安平にして大敵悪党を滅ぼす術」と考え、「斯（し）道利欲私曲の為（ため）に用いる時は、大なるは国を害し、小なるは家を滅する」と戒めている。

甲賀と伊賀は元々一つのものでございましたが、地形的な関係で二つに分れました。昨年（八）月のテレビ撮りの時にも鈴木健二アナウンサーが、甲賀三郎が望月さんの御先祖だということを知ってますか、と言われた時に私は、自信がないのではありませんでした。が、果して千年も前に関東の信州の方から望月氏がこちらの所まで来て代領地をもらつて、郡代となつたことが事実かどうか、も一つにはつきりいたしておりません。むしろ木曾義仲が京都に平家を追つて攻め上つてきた時の木曾義仲の軍隊の中に望月一族が、馬をつれ一緒に参加したことは歴史的事

実であります。後に出てまいりますけれども、望月のルーツは信州の高原の中に大きな牧場を持った一族でございましたから、いざ戦争になればその馬が、全て軍馬として徴用されたに違いなく、戦争が起る度に望月一族はそのように利用されておりました。事実、木曾義仲が京都で敗れた後、その一族の一部が落ち延びて滋賀の里に落ち着いたのではないかと、説もあります。いずれにしても、五百年という長い歴史の中で、甲賀の里に望月家があり、そして忍術の技を絶えず磨いていたことは事実であるようにございます。

お手許の自叙の説明書に「忍者と薬」のことが次のように書かれています。

私の家に、江戸時代の盗難届の巻物が残っている。それによると、天保八年十二月七日の日付で、松平左兵衛守様、御役所という名で、朝熊岳明王院役僧、実応房、寛元房の二人の署名になっている。二百年前、私の家が薬の行商をしていたことの証拠である。

山蔭は山伏村の一かまゑ

この松尾芭蕉の句そのままに、その名も山伏を連想させる竜法師(りゅうぼし)の里は山伏の里でもあった。滋賀県甲賀郡甲南町竜法師に甲賀忍者屋敷があることは先に述べたが、この山伏との関係を調べる必要がある。

山伏の修験道は仙術に由来する。もともと仙術は不老長寿を願う人たちが考え出したもので、

深山幽谷で仙人になるための苦行をするが、この苦行の点で忍術と共通点を持っている。仙人には、天仙・地仙・尸(し)解仙の三階級があって、修業の差と服用する仙薬によって分けられている。このように仙術には必ず薬の知識が要求されるのである。仙術は忍術とともに、人間の能力の限界を超えた神通力を実現させようときびしい修業をするのであるが、忍術は忍具を加え、科学的な技術として発展させ、仙術とはその道を別にした。

日本に入った仙術は、大和を中心に広がり、山岳信仰と密教に結びついて、日本固有の風土のもとで修験道が創(つく)り出された。甲賀の里の南に在る山々は忍者の修業の場であったが、同時に修験道の盛んな山々でもあった。その山の一つに飯道山(いみちやま)があり、飯道寺山(はんどうじやま)とも言われ、かつて役(えん)の行者(修験道の開祖)が開いたという飯道寺がある。この山伏の修験から忍者は多くのことを学んだに違いない。甲賀の里には、その昔、山伏姿で配札(社寺のお札配り)や薬の行商をしていた家が多かったのはその関係である。

延長五年(九二七年)「延喜式」が編さんされ、そのなかの全国から徴収された生薬のリストには、甲賀国七十三種、美濃国六十二種、伊勢国五十種、大和国三十八種、伊賀国二十三種などで、甲賀が全国一位を占めているとともに、この地方全体が生薬の大生産地でもあった。薬は仙術・忍術に通じ、火薬は忍術に欠かすことのできないものであった。

私の祖先の生家であった甲賀忍者屋敷は薬の製造元でもあった。そして、多賀大社や伊勢の

朝熊岳明王院の社寺や祈禱(とう)の札を持って、多賀坊、朝熊坊、〇〇坊と称して全国を行商した。つまり、江戸時代になると、軍事用の忍術は無用になり、平和産業に切り替えざるを得なくなったのである。

私の家の記録によると、第三代目望月本実が、万金および人参活血勢竜湯の二種を創製して代々の家伝薬として販売したとある。第十二代目望月本実(私の祖父、安政二年生れ、昭和四年京都で没す)の代に製薬会社を起こすとある。

甲賀の武士がその忍術の訓練をするので山の中に入りますと、修験道の行をやっている山伏とおそらく一緒になったのではないかと思います。そういうところから実際に源義経が、京都の鞍馬山で山伏兵法を習ったとか云々も、これはある意味では忍術というものと同じようなものだと言われております。実際にその忍術というのは、甲賀や伊賀だけに偏ってしまっておりまして、これも本来、戦争というのは全国で起こっておりますから、関東でも忍術がなかったらおかしいわけでございます。歴史的には関東の方にも忍術が発達した地域が多く、関東では武蔵、甲斐、そして越後、信濃という四つの国、関西の方では、ここでは甲賀、伊賀その他に紀州と三つございまして、このように西と東に集中して忍術が栄えたわけでございます。

最終的には甲賀、伊賀に絞られてしまっております。実際、これらの忍術の発達した地域を調

べると、同時にそこには望月家という名前が多い地域とほとんど重なっております。その中で望月家という名前の戸数はいくらかあるかということ、十年程前のデータで調べてみますと、長野県では約千百戸、山梨県で約四千五百戸、静岡県で約六千五百戸、山梨、静岡というところに非常に多い。一方滋賀県にまゐりますと約百二十戸と極端に少ない。このように飛び離れて滋賀県に望月家という姓がありますのは、千年の昔の時代に甲賀三郎が領地をもらって来た一族なのか、それとも木曾義仲のいわゆる落武者として、ここに居ついた一族なのか、なおはっきりしません。所詮、そのルーツであります信州の望月の流れからしますと非常に少ない集団であるということでございます。

お手許の説明書に「忍術トラの巻」のことが次のように書かれています。

わが家に「忍術応義伝」という巻物がある。難しい漢文で書かれていますので解説できないが多分、忍術とはこういうものだと思われているに過ぎないものと思つてゐる。まして、口に巻物をくわえ、じゅ文を唱えながら九字を切るとパツと白煙が立ちこめ、人の姿はいずこへともなく消え失せるようなことは、「立川文庫」や「忍術映画」のなせるわざで、あり得ないことである。この巻物は太文字の文と、その間に書かれている細文字の文で構成された長文である。今回は太文字の文だけを紹介することにする。

『細記日天明覆地善載於人無常則以何成利以此忍信秘証元為將止明德為兵隨至善存亡上古沒然軍治平初一身堅固加木也其命庇義雖賞寡勿貧是上達不肖也忠信何有別重義則叶夫明而功賞并高武名不有所士欲也簡謀陰術胞寸自至誠起敗大強齊小弱夫尋以天摩利支天揮金剛力士以秘法隨修羅早和漢兵道雖多波旬道妙術不有他以茲神明太子示兩刀軍術守屋退治後忍字得一名古伝雖數編乱時亡失其中十二三書專魔醯際伏陳頭化入一機甲賀一流真法近世鉤火以工夫加勝利為子孫其不有器性無用一子相伝之外雖千金可秘甚妙不思儀要法聖德太子勝天照皇太神宮祈給時有自現伊勢江三境三頭一腰有山是則油日大明神天際遊峯自背天灯明云近民今新太子茲參籠給從神示師而士民強敵守屋退治給具油日大明神之縁記有也明道術書油日大明神納宝殿今世不世出察神秘清濁堅否人有一心矣念々勿生疑執保勿捨委是人奇正為將行何速水能載舟亦能覆舟可慎爾云心身軍禮備陰具卷夜軍卷忍道卷水火卷年月日時王律宮天人地正奇朱雀勾陳玄武青龍白虎五大尊六申之分微妙神虎大乙上天祿』

一般に、忍術トラの巻で知られているのに『萬川集海』（ばんせんしゅうかい）がある。第四代將軍家綱の時代（一六七〇年代）に書かれたものといわれているから、忍術がもはや実用の時代でない時期にまとめられたものである。この萬川集海については、村山知義氏著の『忍びの者』に詳しく述べられている。この中の一部を紹介して今の時代への警鐘としたい。

「さて、この膨大な忍術虎の巻のなかで、今読んでも興味深いところは、陽忍編である。これ

は要するに、人をだますにはどうすればよいか、ということが、微に入り、細をうがって書いてあるのである。人をだます最大の原理は、その人が好むものを与えるに如(し)くはない。人の好む最大のもは金と女である。金と女で陥落しない人間はない、というようなことが書いてある。なかなか陥落しない者でも、根気よく持続的に攻めかけ、それで駄目でも、もし金の量をうんと多くし、また飛び切りの美人を押しつければ、きつと陥落する、ともある。

だから、目をつけた人間があつたら、相手がびっくりするほどの贈り物を、連続的に付け届けるべきだ、と説き、その付け届けの仕方なども丁寧述べている」

引き続きお手許の説明書を見ますと「望月城の落城」が次のように書かれています。

八世紀のはじめのころ、すでに、長野県東部の平原に多くのすぐれた牧場があつた。それには官牧場と私牧場があつた。官牧場は軍用馬、馱馬、朝廷馬、神社への献進馬等であつた。土豪の滋野氏は最も大きな牧場を持ち、農耕馬のほかに軍用馬の生産に励んでいた。この私牧場は後に官牧場に変えられた。毎年八月十五日、すなわち、もちの月のころ、信濃の貢馬を天皇が紫宸殿で御覧になる習わしがあつたので、この地方が「望月」といわれ、また、望月之牧(今の御牧が原)ともいわれた。

逢坂の関の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒

この紀貫之の和歌に出ている望月が地名であると分かれば意が通じよう。

昭和三十四年、一町三カ村が合併して望月町（長野県北佐久郡）が誕生した。軽井沢の西、小諸という鉄道駅の西南部に位置している。望月城跡が往時をしのばせるが、望月氏を名乗る家は一軒もない。落城後の悲惨な事情を物語っているようである。

清和天皇第四皇子である貞保親王（貞観十二年（八七〇年）御出生）は、天皇家と関係があった滋野家へ入られたという記録がある。この滋野家は望月之牧を経営し、常時千頭以上の馬を持っていたといわれる。当時は、軍用馬一頭は兵千に匹敵するともいわれていたから、強大な勢力を持つ豪族であった。この滋野家から望月、海野、弥津の三家が分家した。

その後、七世紀にわたり望月氏は栄えたが、軍用馬を提供できる大牧場を持つが故に戦争に巻き込まれる羽目になった。すなわち、天文十二年（一五四三年）に、突如、武田信玄から戦いを挑まれた。望月氏は頑強に抵抗したが、衆寡敵せず、武田の騎馬軍団に降り、以後武田氏の幕下となった。望月氏を中心とした佐久地方は川中島への兵站（へいたん）基地で、兵も馬も食糧も陸続として川中島へ送られた。幾度かの川中島の合戦で望月城主盛時も戦死している。つづいて、天正三年（一五七五年）に、武田勝頼は織田・徳川の連合軍と長篠の合戦を挑み大敗を喫している。この合戦に参加した望月城主信雅をはじめ多くの武将が討ち死にしている。最期に、天正十年

(一五八二年)に、徳川家康兵を發し、望月城を囲み攻む。籠(ろう)城すること一カ月、奮戦空(むな)しく城主昌頼以下全滅、落城の悲惨な結果となる。本来、牧場を經營し平和な生活をよしとしていた望月氏一族はすべて流浪の身となり、近くの静岡県や山梨県へ落ち延びていった。

天慶二年(九三九年)に、平将門の乱平定に功のあつた望月三郎広重兼家のことは先に述べた。改名して甲賀近江守三郎兼家と名乗つたが、望月が地名であつたことを考えると改名の意味が良く分かる。ともあれ、私は望月城落城時の望月氏一族でなく、早くから甲賀に移り住んだ一族とみている。

私は丁度、偶然でございますけれども、昨日、一昨日と二日にかけてルーツである長野県の望月町まで、望月家の一族とともにバスに乗って行き、昨日帰つてきたところです。長野県の望月町といましてもちよつと場所的におわかりがないかもしれませんが、ちよつど軽井沢の西、南へ行つたところです。その東北に浅間山があつて、その西南に諏訪湖があります。そのちよつど中間点のような位置で大きな高原になっております。この地に望月家があつたのです。なぜあつたかというそれは馬でございます。多数の馬をそこで放牧し、そして飼育しておりました。その一族でございます。一番多い時には望月家だけでも千五百頭以上の馬を持っていたというので、これが先程言いました通り、いったん戦争が起りますと馬と馬にたずさわる人々が全部

徴発されました。望月一族は過去の大きな戦争に全部かり出されておりました大変苦しい目にあっています。

その平原は、当初は私的にその牧場を経営しておりましたので、私牧場といっておりました。途中から、朝廷から官牧場の指定がされました。その関係で、毎年朝廷の方に馬を献上しなければなりません。当時の記録によりますと、毎年望月家だけで二十頭献上いたしておりますが、これを京都の御所まで運ばなければなりません。それが毎年の儀式になりました。毎年八月の十五日、満月（望月）の日に朝廷に馬を献上するというならわしになっておりました。それがいつしか望月の馬ということで、望月自身が地名になってしまいました。先程言いました望月城の横の平原一帯が、望月の牧場と当時言われております。今は望月の牧場といわずに御牧ヶ原みまきがはらと言われています。敬語がついておりますのはそういう関係でございます。そういうことで望月というのは元々の出発は、月ではなしに地名から始まっております。そして、人の名になっていきました。そこに紀貫之の和歌が出ております通り、「逢坂の関の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒」とございます。この望月の駒今やひくらむと、これは逢坂山から馬が京都に入ります前に、儀式として朝廷の役人がここまで馬の出迎えに行くという習慣がございまして、そのことを詠っている和歌でございます。そういう意味で、この望月の駒は満月の駒じゃなしに、望月の牧場の馬だという意味の地名を表わしております。またそういう意味で、望月の馬が大変優秀であったとい

われています。

現在の望月町でございますが、これは昭和三十四年に合併して町になっております。望月町の人口は一万一千人で、その町の大きさが一万一千ヘクタールといえますから、一人当たりの土地が一ヘクタール（三千坪）もあります。大変大きな土地に僅かな人口しかないということがわかります。不思議なことに、望月町には今でも望月という名の姓を名乗る人は一人もおりません。これは何故かといいますと、七世紀という長い間にわたって望月家は栄えましたが、軍用馬を持つために大きな戦争に巻き込まれ、遂に滅びることになりました。望月町で望月という姓を名乗ると、当時は村でございますが、望月城落城後はそこにおられませんでしたので逃げるか、そこで生活する場合には名字を変えるか、どちらかを選んだと思います。従っていまだに一軒も望月という姓を名乗る人がおりません。今ではあっても別にどうもないんですけれども。もともと、私の方の一族は、望月城の落城に居合わせた一族ではなしにそれより前の望月三郎の時代の一族か、あるいは木曾義仲の軍と一緒にあって京都へ攻め上った落武者か、いずれにしても直接、望月城の落城には、私達滋賀の望月の方は関係してないようでございます。

甲賀の忍者屋敷というのは現在、観光施設になっていますが、茅葺きの大きな農家そのものでございます。これは江戸中期の作でございますからそういう点、そこにくらくり装置があるというのはその昔、それを忍者が使ったということではなしに、昔いろいろ落武者が甲賀屋敷に匿わ

れたと言いましたが、そのころの建物はわかりません。いずれにしてもこれは、外から攻めこまれた時に、からくりで防げるようにしていることについては間違いはありません。実際に忍者屋敷というよりもやっぱりこれは薬の生産の関係で、そういう建物の構造になっているように思います。御承知のように、当時の薬というのはたいへん貴重品でございますから、またその製造課程は全く極秘でございますから、簡単にそれが盗まれたら大きな被害を受けることから、絶対にその薬の製造が外に洩れないようにそういうからくり装置を使って、そして忍びこまれないようにしているのではないかとことです。従って、屋敷は茅葺きでも茅葺きの下地には、厚さ一・五ミリの巾二センチメートル位の帯鉄を九センチ間隔に貼りつけておりますから、屋根を破って中に入るといふことは不可能なことになっております。

これが現在の甲賀忍者屋敷の全景でございます。真正面に見える建物が忍者屋敷で、屋根は茅葺きで平屋に見えておりますが、この建物は二階、中三階と三層になっております。正面の右の所が玄関でございます。これは去年の八月のテレビ放映の時の撮影が済んだあと記念写真を写しております。(写真)真中は鈴木アナウンサーで、他は望月、甲賀の忍者に関係した一族が並んでおります。この正面の明るい所が玄関でございます。玄関から入ったところの押入の中に梯子が立て掛けてあります。その向こうのところに窓があって、そこから誰が入ったかということがこっそり判るようになっております。いずれにしてもこの梯子は押入の戸を閉めますとわかり

ません。開けて、これは使うことができますが、二階へ上がるとこの梯子は上へ引上げられ、そのうえ、二階の床を蓋ふたしますので、はじめての人は二階へあがれないということでありませう。左のところは上から縄梯子が降りてきておりますが、この縄梯子は三階から直に一階へおりられるようになっております。現在、下は板が張ってありますけど、昔は土間であつたと思ひます。二階へ上がつて、そして三階からこの縄梯子でおりにくるとか、あるいは飛び降りてくるとかいうふうなことができるようになっております。いずれにしても襲撃を避けたり、避難できるとかということが中心になつてゐる建物でございます。一階のところ、奥の座敷に窓があります。この窓は鉄の棒が入つて金網がしてあります。嵌め殺しの窓でございますが、これが嵌め殺しであつても、中からハガキ位の厚みのものを隙間から差し込んで、下から上へと上げますと、窓の枠の所に打掛金物が、と言ひましても櫓で作つておりますが、そういうものがあつて、それが下から上へ押されると外れるようになっております。襲撃された時は素早くその窓から逃げ、その後パタンと窓を閉めますと、また自動的にその打掛金物が下りて、今度は出られないということで、攻め込んできた敵を中へ閉じ込めるといふ役目をしてゐるようになってございます。

大変飛び飛びで申し上げまして、全体的に整理されておりますので、お聞き苦しい点があるうかとも思ひますけれど、一応これで私の説明を終えさせていただきます。どうもありがとうございました。

「年譜で見る甲賀忍者の歴史」

- 一、天平十年（七三八）、望月の牧の駿馬（しゅんめ）を神馬として朝廷へ奉獻す。
- 二、延暦十三年（七九四）、平安京へ都を移す。
- 三、貞観七年（八六五）、望月の駒の朝廷への貢馬日を八月二十九日から八月十五日に変更される。
- 四、延長五年（九二七）、『延喜式』編さんされ、全国から徴収された生薬一覧の項には甲賀の種類は七十三種とあり全国第一位を占めている。
- 五、天慶二年（九三九）、平将門の乱で戦功のあった信州の武士、望月三郎広重兼家が甲賀の地を賜り、甲賀近江守三郎兼家（甲賀・伊賀流忍者の元祖といわれる）と称す。
- 六、治承四年（一一八〇）、木曾義仲軍に加わり平家を攻め信州より京に上る。ついで、天曆元年（一一八四）、木曾義仲戦死す。丁度八百年前のこと。
- 七、長亨元年（一一八四）、九代将軍足利義尚は、数万の大軍を率いて近江へ出陣し、栗太郡鈎莊（まがりのしよう）に本堂を築き、その地の大名である六角高頼を攻める。この六角高頼から援助の要請を受けて出陣した望月出羽守一族は、自由自在に霧を湧（わ）かせて足利軍を幻惑した。この不思議な術は忍術であると記録されている。甲賀の望月一族の忍術が、この時はじめて公式記録に登場する。五百年前のこと。

八、天文十二年（一五四三）、信州の望月氏が武田信玄に攻められ軍門に下る。同じ年、種ヶ島に鉄砲がたどりつく。三年後、甲賀の里の隣の油日村で火薬の製造がはじまる。

九、永祿四年（一五六一）、望月一族武田軍に従って川中島に戦う。望月城主盛時戦死す。

十、天正三年（一五七五）、長篠の合戦に武田勝頼軍に従って出陣し、望月城主信雅以下戦死す。

十一、天正十年（一五八二）、信州の望月城が徳川家康軍に攻められ落城す（ちなみに、二年後の天正十二年に宮本武蔵が生まれる。四百年前のこと）。

十二、寛永十五年（一六三八）、島原の乱に望月兵太夫、与右衛門他甲賀忍者十名が参加す。

十三、延宝（一六七六）、忍術を集大成した書物『萬川集海』が編さんされる。

十四、元治一年（一八六四）、甲賀武士、京都御所守衛に出勤す。

十五、慶応四年（一八六八）、甲賀武士、討幕軍に参加し、北陸に転戦す。

十六、明治三十五年、忍術本家、望月本実家第十二代本実が、近江製剤株式会社をおこす。

十七、昭和三十年、甲賀忍者屋敷が地元の考古研究家により発見される。

十八、昭和三十四年、一町三カ村が合併して望月町（長野県北佐久郡）が誕生す。

（元京都市技監
望月建築計画コンサルタンツ所長）